

フロイト理論における母と娘—ジェンダー研究の視点から—（後編）

石 井 香 江

3-2. 子どもの発達史をめぐるフロイト理論の概要

前節では母親との関係を軸とした女性の社会化という観点から、フロイト理論を読みなおそうと試みたが、本節ではさらに一步踏み込んで、子どもの性愛の発達史を一男児と女児を比較しつつ詳しく検討してみたい。

フロイトは「性対象倒錯者」（Inversion）と「性目標倒錯」（Perversion）が先天的な変質であるとする従来の理解を覆そうとし、人間の子ども時代に遡って、成人期にまで至るその性愛の発達史を跡づけた。生得的な素質である「性愛」のあり方は、発達史の起点に位置する母子の相互関係によって、後には家族の成員との関係によって変容する。つまりここでは母や家族が子どもの発達史に与える影響の大きさが示唆されるわけだが、初期のフロイトはそれが可能となった理由を「快」の獲得に結びつける。ところがフロイトは後期に、この快感原則（不快が心の緊張の増大を、快が心の緊張の減少を招く）を修正する。快感に満ちた緊張や不快に満ちた緊張の緩和という現象が実際にはあり、緊張の質的な要因を無視して、もっぱら心的過程をリビドーの増減として量的に測定することはできない。こうしてフロイトはマゾヒズムを三つに類型化し、それぞれの分析に入っていくのだが、中でも「道徳的なマゾヒズム」は「超自我の処罰や、外部の権力による処罰を求める」もので、家族や社会の中における子どもの発達史を考察する際の手掛かりとなる。ちなみに社会学者パーソンズも「快」の起源を核家族、とりわけ母親ととらえ、フロイトの理論的枠組みを継承している（しかしパーソンズはさらに、母子関係のダイナミズムと社会化過程が行われている体系として、社会関係の構造も系統的に分析しているが）¹¹⁾。

3-2-1. 性欲動 (Sexualtrieb) とは何か?

フロイトは「性欲論三篇」(1905)²⁾において子どもの性愛 (infantile Sexualität) の発達史を跡づける。性対象 (Sexualobjekt) や性目標 (Sexualziel) の「倒錯者」を考察する上で、先天的か後天的かという二者択一は、適切でないことを示すためであった。フロイトは性対象倒錯者を a. 絶対的性対象倒錯者, b. 両性にわたる倒錯, c. 機会的な性対象倒錯の三つに分類し, c. の存在は性対象倒錯が先天的であるとは限らない証拠であるという。また人生の早い時期の性的印象, 異性との交際に伴う危険, 戦友などから性的影響を経験しながらも, 性対象倒錯者にならなかった者は多数存在し, 後天性も十全な理由にはならないという。他方で解剖学の領域において, 性対象倒錯者は両性兼備しているという説もあるが, フロイトは以下の理由でこの説も退ける。確かに男性と女性の特性を兼ね備えた性器を有する (半陰陽) 人がある。しかしこの見解を心的領域にも応用して, 性対象倒錯を容易に心的半陰陽と理解できるのだろうか。もし性対象の倒錯と並行して, その他の心的特性, 欲動や性格特質も急激に異性のようになるのなら, 心的半陰陽は信憑性をもつ。だがそのような現象は女性の倒錯者だけにしか確認できず, 男性においては性倒錯と心的に全く男性的であることが, 矛盾なく一致するケースもあるという。フロイトはこれに対し, 彼らに共通する環境要因を示唆する。つまり性対象倒錯者は, その小児期の初めの数年に, 女性 (たいていは母親) に対する非常に強烈な, 短期間の固着の時期を経ており, それを克服した後は自分を女性と同一視し, 自分自身を性対象として選ぶようになる。それから母親がそうであったように自分を愛する, 自分自身に似た若い男性を求めるのだという。また性対象倒錯者が女性に引き起こされた興奮を, 絶えず男性に転位することも発見された。男性への強迫的な欲求は, 女性からの逃避に規定されている。小児期に強力な父親が不在であることも, 性対象倒錯を起こす要因であるという。ここでフロイトは同時に, 生物学者オイゲン・シュタイナハの例 (結核で睾丸をおかされた男性の性の変調) を挙げ, 「同性色情」ならびに「性特徴一般」の器質的な制約について触れている。フロイトはこうした一連の研究を通して, 性欲動は性対象から独立していて, 対象の刺激によって起こされたものではないことを確信した。それでは欲動とは一体何であるのか。フロイトによれば欲動とは, つねに流動し続けている体内の心的な刺激源の一つである。これは外部からの単一の興奮によっ

て引き起こされる「刺激」とは異なる。欲動とはつまり、心的なものと身体的なものの境界概念の一つである。欲動の源泉は、一つの器官において起こる刺激的なプロセスであり、欲動の最も手近な目標は、この器官の刺激を除去することである。ところで、身体の器官からは二種類の異なる刺激が出されており、このうちの片方は性的な興奮と呼ばれており、この興奮を出す器官は、その性的な部分欲動の性感帯である。「正常な」人の性感帯が性器である一方で、神経症者、強迫神経症やパラノイアなどは、性感帯は性器に代わる、あるいはこれに付随する器官である。

3-2-2. 無視されていた幼児の性愛

性目標倒錯は生得的なものを基礎としているが、素質に応じて強度に差があり、生活の様相によって倒錯として現れたり、現れなかったりする。この生得的なものは、性倒錯として現れるか、あるいは抑圧が不十分であるために、疾病という迂回路を経て、性的なエネルギーの相当な部分を引きつける（神経症）かどうかの違いがある。全ての人にあらゆる種類の性目標倒錯の萌芽が存在するが、これは幼児においてのみ確認できる。つまり神経症者は性の幼児的な状態をそのまま維持しているか、あるいはこうした状態に退行したと理解される。したがって性欲動の解明には、遺伝的な性質よりもその個人を構成する幼児期を重視するべきであるという。新生児は誕生の時点で、性的な興奮の萌芽を備えてさえいるのである。性的な生活も3~4歳頃から観察することが可能である。にも関わらず幼児には性愛がないと考えられてきたのは、私たちがこの時期の記憶を非常に不明確にしか持っていないこと、つまり「小児健忘」に規定されているからであるという。個人がもはや意識化できない多量の記憶痕跡(Erinnerungsspüren)は、連想に頼ることなく想起することはできないのである。

3-2-3. 幼児における性の潜在期(Latenzzeit)とその消滅

小児健忘には性的な事柄を抑制する力が介存している。幼児期の性の潜在期(性的な事柄の発動は外からは見えない時期)には、遺伝的に固定され、器質的に条件付けられた心的な力が、性欲動を阻止としているという。フロイトによれば、この際に教育が果たす役割は、二次的なものに過ぎない。いわゆる昇華のプロセスが始まるのもこの時期である。潜在期には生殖機能が停止してい

るため、小児は自分の性的な興奮を利用できない。このため性的な興奮は「倒錯」であって、個人の内に不快な感情しか生みださない。この不快を生み出すという反動形成 (Reaktionsbildung) により、嫌悪感や羞恥心、道徳心が構築される。幼児の性愛を昇華という形で利用することが教育の理想ではあるが、個人の発達は多くの場合この理想を「逸脱」するものである。フロイトも後に「自らを語る」(1925)¹⁹の中で認めているように、潜在期は生理学的な現象ではあるが、同時に文化にも規定されている。例えば小児性愛の抑圧は、大概の原始民族において行われていないという。

3-2-4. 幼児の性愛の性目標

フロイトは次に、幼児の最初の性の表現に言及する。それは母親の乳房（またはその代理物）を吸引する動作に伴って快感を得られる「おしゃぶり」である。ここでは性的な満足が生命を維持する機能に委託されており、その意味で自体愛的である。子どもに歯が生えて栄養物を咀嚼するようになり、性的な満足を反復 (Wiederholung) したいという欲求と、栄養物の摂取の欲求が分離して始まったのが「おしゃぶり」なのである。自分の意のままにできない外界から独立していることが快適であるために、幼児は自分の皮膚を吸引の対象とする。「おしゃぶり」は恍惚を伴う吸引であり、ここに口唇領域が第二の性感帯となる端緒が開かれる。フロイトが強調するのは、身体の様々な部分には性感を引き起こす特性が備わっていて、快感を生み出すのは身体の部位の性質よりも、そこに与えられる刺激の質だという点である。ヒステリーの場合は性器領域が抑圧の対象となるので、性器以外の部位が刺激に対して敏感になるという。

3-2-5. 性的表現の萌芽

口唇領域では満足を得るために吸引という手段を用いていたが、その他の領域では筋肉活動が必要になる。子どもが肛門領域の性感的な刺激を上手に利用しているかどうかは、排便を我慢し、便の量が次第に多くなって激しい筋肉収縮を起こし、それが肛門を通過する際に、粘膜を刺激するようにしているかどうかで見分けられる。便は子どもにとって周囲の人に与える最初の「贈り物」という意味を持っている。小児がこれを周囲の人に与える場合には、小児の従順さを、与えない場合には反抗を示している。便はこの「贈り物」としての性

格から、次第に「子ども」の意味を持つようになる。フロイトは後に「性格と肛門愛」(1908)⁴⁾において人間の性格と肛門の働きとの、内的な関連について考察を進めている。フロイトによれば、性的な目的に利用できない肛門愛は、文明世界の教育によって昇華されるという。このため几帳面・儉約・強情という性格複合が現れる。ここでフロイトは、性的表現の萌芽である小児のマスターベーションの時期を(1)乳児期、(2)四歳のころ(短期間の性的な活動の開花)、(3)思春期の三段階に分ける。子どもの性的領域は、初期の性的な興奮の担い手とはならないが重要な意味を持つ。両者とも排尿と関係のある器官であって、つねに分泌物に覆われていること、その解剖学的な位置、身体を清潔にする際に洗ったり摩擦したりするため、偶然に刺激が加えられる可能性がある。とりわけ(2)の時期における性的な活動は、人の記憶に深い(無意識の)印象を刻印するので、健全に発達した場合にはその人の性格を決定する。他方でその人が神経症になった場合には、この性的な時期が忘却されている。したがって性的な活動の再開には、内的な要因と外的なきっかけ(誘惑)が必要とされる。フロイトは、この自覚が内的な要因から自然に生じると確信する。しかしこうした誘惑の影響から、幼児は多形倒錯(polymorph perverse)になる可能性があるという。小児には羞恥心、嫌悪感、道徳心など、性的な倒錯に対する障壁が確立していないので、まるで「教養が低く、多形倒錯をそのまま保持してきた一般の女性と同じように」、抵抗なく振舞うのだという。ちなみに子どもの性生活においても、他者を性目標とする窃視欲動、露出欲動、残忍性の欲動(サディズム)といった部分欲動の存在が確認されている。

3-2-6. 幼児の性探求 (Infantile Sexualforschung)

3～5歳の頃には、知の欲動または探求の欲動と呼べるような活動が開花する。個の欲動の営みは、征服欲動の昇華という性質を備えるとともに、窃視欲のエネルギーを利用して行われる。性差の問題よりも先ず、「子どもはどこから来るのか」という謎に、子どもはとられる。性差が特に意識されないのは、子どもは知人の全てが自分と同じような性器を持っている、と考えているからだという。しかしこの確信は、去勢コンプレックスとペニス羨望を経て放棄される。子どもは性的なプロセスについてよく理解しているが、精子が受胎を助ける役割を果たすことと、女性の身体に膣口が存在していることが認識できな

い。世界の中に自分の起源を探るという、この最初の試みの挫折こそ、信頼する人に対する疎外感を育むきっかけなのだという。

3-2-7. 性的な体制の発展段階

フロイトは以上の考察から人間の性愛の発展段階を、性器領域がまだ支配的でない前性器体制と性器体制の二つに分ける。前者の特徴は、(1) 本質的に自体愛であること、(2) 部分欲動が互いに連絡もなく、独立して快感を獲得しようとしていることで、これが発展して最終的には成人の「正常な性生活」が形成される。この性生活では(1) 快感の獲得が生殖機能に奉仕するものとなり、(2) 部分欲動は単一の性感帯のもとに統一され、(3) 他者を性対象として選択する強固な体制が構築される。フロイトはさらに前性器体制を二つの、後には三つの段階に分割する。すなわち(1) 口唇的または食人的な体制と、(2) 肛門サディズム的な体制である。前者において、性的な活動がまだ栄養物の摂取と分離しておらず、この体制の内部の異なった要素がまだ対立関係を形成していない。性目標は対象を同化することにある（これは後の段階で同一化として重要な心的な役割を果たすようになる）。一方後者では、能動性と受動性という対立が形成されている（男性的・女性的という対立ではない）。受動的な性目標となる器官は、主として性感的な腸の粘膜である。能動的な活動と受動的な活動の目標は同じではなく、さらに他の部分欲動が自体愛的な形で働く。したがってこの段階では、受動性と能動性という性的な両極性が存在することと、対象が他者であることが確認できる。後にフロイトは、「幼児の性器体制（性理論への補遺）」(1923)⁶⁾において、三つ目に「男根的性器体制」を加えている。この段階において、幼児の性器への関心や性器の活動は成熟期と変わらない。しかしここで男性の性器だけが、重要な役割を演じている点は注目に値しよう。ペニスという器官は少年の探求活動にとって、絶えず新しい課題を提供する器官であるという。幼い男児は、性差を性器の差異として認識する機会がない。少年はこの性的な探求のなかで、少女にペニスがないことを発見した場合、その事実を否認する。あるはずだと思い込み、まだ小さいがこれから大きくなるのだと考えるのである。ここで「去勢」という概念に触れ、保護者による自慰の抑圧もあいまって、ペニスを切断されるのではないかという去勢コンプレックスが活性化される。フロイトは「解剖学的な性の差異の2, 3について」

(1925)⁶⁶において、この段階における女兒のペニスに対する反応についても記している。女兒は兄弟か遊び友達の「はっきりと目につくような、大きくなったペニス」に気付き、それが「自分の小さい、堂々としたところのない器官」に勝ることを認めるや否や、その時からペニス羨望 (Penisneid) になってしまうのだという。

3-2-8. 対象選択 (Objektwahl) の二つの時期

対象選択とは、ある対象を認識し、それと密接な関係を取り結ぶことである。これは2～5歳までの時期に始まり、それが休止または退行することによって、潜在期に移行する。そして次の段階は思春期とともに始まる。最初の対象選択は抑圧されるために、性生活の <情愛の流れ> (zärtlich) を形成するに止まる。しかし次の段階のそれにおいては、幼児的な対象として <官能の流れ> (sinnlich) が再開される必要がある。この二つの流れが合流しない場合には、一つの性対象に統合された性器体制に到達できない。理解を深めるために、ここで母親を想起してほしい。幼児期には母親の無償の愛や世話を期待することができた。そこで幼児はただ受動的に快を享受するのみであり、対象にリビドーを備給 (Besetzung) する必要はない。しかしこうした自体愛的な存在はやがて、リビドーを対象に備給する必要に迫られる。それは母親からの分離を要する。両性にとって「最初の愛の対象である母親」からの分離は、苦痛を伴う作業であるが、人が大人になる過程では重要である。したがってフロイトによれば、情愛に溺れやすい神経症素質の両親は、子どもにもその素質を継承することさえあるという。こうした事態を回避し、より高い社会的な統一を生み出すために、近親姦の制限 (Inzesttaboo) がある。この制限は性的成熟の猶予期間に機能し、子どもはこの間に道徳を学び、他方で家族との結合を緩めるよう働きかけられる。

ところで対象選択はこの段階より以前に、さしあたり観念の中で行なわれていた。空想 (Phantasie) のなかで小児的傾向 (例えば母親に対する男児の、父親に対する女兒の性的興奮) が現れるが、思春期にはこの空想を克服し、放棄する。神話や創造活動の源泉でもある、「空想」という作業が伴う「両親の権威からの離脱」の過程については、「神経症者の家族小説」(1909)⁶⁷ に詳しく述べられている。友人の両親と自分の両親を比較すると、それまでは両親は比

較しがたい唯一の存在であると考えてきたことに、疑問を抱く権利を獲得する。子どもの生活における小さな出来事が不満を引き起こし、両親を批判する機会を与えるのである。友人の両親が自分の両親よりも優れているという知識が、この際に利用される。神経症の心理学によれば、ここで性的な競争関係を意識した激しい興奮が働くという。ここで働いているのは、親を軽蔑したいという感情である。この機会は子どもの生活にはよく訪れ、子どもは両親の完全な愛を受けていないと感じる。他の兄弟姉妹との間で、両親の愛を分かち合わねばならないことを恨むのである。少年は母親よりも父親に対して敵対的な興奮を示し、母親よりも父親から解放されたいと感じる傾向が強い。他方で、「少女の空想活動は、はるかに弱いようである」と、フロイトは続けている。ところが後に「(小児の性生活) この心的な最初の形体を探究したときに、いつでもその研究の対象として取り上げたのは、幼い男児だった。幼い女児の場合もこのことは似ていて、ただ、どこかで違っているように営まれているに違いない」が、「はっきりと分明せぬ発達の経路のどこの所にこの差異が見出されるかは一向に明らかにならない」(1925) と言いかえている。つまり少なくともこの時点において、女兒に関する記述は憶測の域を越えないし、まして父と息子に代わる母と娘の関係の考察に至ってはいない。

ここではひとまず、両親と子どもの葛藤の力学に話を戻そう。両親との関係が疎遠になり始める段階が進行すると、「神経症者の家族小説」と呼ばれる段階に入ることは既に述べたが、通常これが意識されることは稀であるという。この特別な空想は前思春期の頃に子どもの遊びの中に姿を現し、その内容は家族関係をテーマとしている。白日夢がその実例であり、これは思春期を越えて続くこともある。白日夢には願望を充足させ、人生を自分の好きなように手直しするという働きがある。子どもの空想は、価値が低下した両親を追い払い、社会的に高い位置の両親を、自分の両親にするという役割を果たす。しかしその後、父親と母親の性的関係に関する知識を獲得すると、子どもは母親が自分の親として最も確実な存在であると認識する。子どもにとって母親は変えようがないが、想像の中で父親の身分を高めることができるのである。それは、強い性的な好奇心の対象である母親が、秘密の内に夫に不実な愛情を抱いていると考える欲望でもある。フロイトはこの欲望を、「愛情生活の心理学への寄与—男性の愛人選択」(1910,12,18)⁶⁹ において「エディプス・コンプレックス」と

名付けている。「少年は母親その人を今新たに理解された意味で激しく愛しはじめ、父親をこういう願望を達成する途上での邪魔者の恋敵として見なして今新たに憎みはじめる」という。このエディプス期に同性の人々に対する敵対関係が形成され、それによって小児の性生活は正常な形態へと移行する。自体愛的であった性欲動が性対象を見出し、この目標を達成するために全ての部分性欲動が協働する。性欲動が性器領域の支配に服するに至って、対象選択の課題は異性を誤りなく選ぶこととなる。フロイトによればこの時点を境に、男女の性愛の発達とは著しく異なるものになっていく。男性の性欲動が利他的な生殖作用に役立つのに対して、女性の場合は性対象と性目標に向けられた、情感的と肉感的という二つの流れが厳密に合致せず、そのために性生活の正常性が保証されない。結果として、女性には「性生活の病的な障害、発育の阻害」が起こる可能性があるというのだ。「女性となるには、小児的な男性要素の一部を廃棄し、女性に主導的な性器領域の変化を準備させるような、ある抑圧を新たに必要とする」——あの「思春期の頃の抑圧というひと突き」⁹⁾ をである——。

3-2-9. 「女性のペニス羨望」(Penisneid)

「ペニス羨望」はフロイトが女性神経症者の研究を通じて発見したもので、「男性のようにペニスを所有したいという願望」(1917)あるいは「陰核の劣性の発見」(1925)であり、この幼児的な願望が再び活性化されることで、神経症の症状が現れることがあると定義している。これはまた、去勢コンプレックスの一部であると考えられる。フロイトは「欲動転換、特に肛門愛の欲動転換について」(1917)で、「ペニス羨望」が前エディプス期とエディプス期以後では変貌することを跡づける。幼児期の初め女兒は男性のようにペニスを所有したいと願っていたが、(まだ幼児期ではあるが)後にこの願望の代わりに子どもを持ちたいという願望が生まれる。成長してから神経症になる条件が存在していない女性では、反動形成として「ペニスの付属物」である男性への欲望となる。「この転換によって、女性の性機能に逆らっていた営みが、好ましい営みに変わり、女性は男性を対象として選択する愛情生活を送ることができるようになる」。ペニス願望が子どもを持ちたいという願望へ移行することで初めて、女性はナルシシズム的な自己愛から対象愛への転換を遂げるのだ。つまり女性が男性へ至る道は、あらかじめ用意されているのではない。女性が「難

なく」男性に至るために必要とされるのは、「愛情を持った結びつきの対象が、母親から父親に転換されること」で、それこそが「女性らしさをもたらす発達の主要な内容である」(1931)という。その契機は「性器が劣っていることの発見のすぐ後から、母親から余計に愛されている他の子どもたちに対する嫉妬が始まり、それによって、母親への結びつきから解かれる」(1925)ことである。女性の兄弟構成、妹や弟がいつ誕生したのかという偶発的な要素は、女性のペニス羨望の形態を多様にしているという(1917)。

3-2-10. 女性のエディプスの状況

晩年のフロイトが女性の性愛に考察を向けるようになったことは既に述べた。「女性の性愛」(1931)⁹⁹でフロイトは、同性の親への敵対関係を示す「エディプス期」モデルを修正する。女性が母親に対して敵対的な姿勢をとるのは、前エディプス期であるという。それがエディプス的な状況のなかで強化され、利用されただけにすぎない。男児と同様女児も母親に愛着を抱くが、フロイトによればこの愛着は、五つの機制によって父親に向けられるようになる。すなわち(1) 幼児の性愛という状況そのものに規定されている要素、(2) 女性の去勢コンプレックス、(3) マスターベーションの禁止、(4) 母親への非難、(5) 少女の母親への最初の愛情が激しすぎるため、それは破滅しなければならないというアンビヴァレンツである。続けて(1)～(4)に説明を加えてみよう。(1)は少年の愛情生活にも見られ、第一に嫉妬に特徴付けられている。それは兄弟姉妹や、同時に父親への嫉妬である。そして第二に幼児の愛情は本来目標を持たないことにある。だからこれは必ず幻滅によって終わりを告げ、その代わりに敵意が生まれる。リビドーは満たされない状態を離れて、新たな対象である父親を求めることになる。(2)は少女が自分の器官の劣等性に気付くことで、次の三つの方向に分岐する。a. 全体の性生活を放棄する。b. 反抗的に男らしさを過剰に強調したり、同性愛的な対象選択が行われ。c. 最終的な女性らしさにむかって発達する。つまり迂回をしながらも「正常な女性の性愛につながる」よう、父親を対象として選択するのである。女性のエディプス・コンプレックスは長い時期を経て到達したものであり、少年のように去勢コンプレックスによって崩壊するのではなく、このコンプレックスによって作り出される。女性においてエディプス・コンプレックスは、克服されない場合が非常に多い。

フロイトはこうした理由から、「自我とエス」(1923)¹⁰で女性の超自我が弱いと述べている。超自我が形成される前提は、エディプス・コンプレックスの克服と父親コンプレックスである。つまりエディプス・コンプレックスを引き継ぐ形で、自我のなかに父親という強力な対象を導入(同一化)することである(エスが放棄した備給を引き継ぐ)。(3) マスターベーションをやめるきっかけになるとともに、それを禁じた人物すなわち母親やその代理者に対する敵意を抱く動機ともなる。(4) 母親に愛着するこの時期の最後の頃に、自分に男の子のような性器を付けて生んでくれなかった、すなわち女の子として生んだことを理由に、少女は母親を非難するようになり、これが愛情の対象を母親から転換する強い動機となる。母親に対する第二の非難は、十分な時間をかけて授乳してくれなかったという非難であるという。

以上のように、母親だけに愛着を示す前エディプス期に遡ることによって、女性の性生活の多くの現象が理解できるとフロイトは確信した。ここで夫婦関係に残存する前エディプス期における母子関係の影響が指摘される。父親を手本に夫を選ぶ女性の多くは、夫を相手にして母親との「悪しき」関係を反復しているという。抑圧された原初的な母親との関係が結婚生活に現れることは、「退行」の身近な現象であるという。それでは母親との「悪しき」関係とは一体何を意味しているのだろうか。

3-2-11. 母親との「悪しき」関係

子どもが母親との間で経験する最初の性的な体験は受動的である。幼児は母親から食べ物を与えられ、身体の手話を受け、衣服を着せてもらい、全てについて母親の支持を受ける。幼児のリビドーの一部はこの経験に固着し、これに伴う満足を享受する。しかし他のリビドーは、能動性に向かって方向転換する。例えば子どもは、最初には母親の乳を与えられていたが、これを能動的に吸引する動作へと転換する。また受動的な体験を遊びを通じて、能動的に反復して満足を味わう。あるいは実際に母親を対象として、母親に対して能動的な主体として振る舞う。多くの少女は、能動的な願望を遊びにおいて間接的に表現する。少女が人形に対して母親のように振る舞うのは、少女の能動性である。人形に対する少女の偏愛は、対象としての父親を完全に無視して、母親だけに愛着していることを示しているという。少女の母親に対する積極性、攻撃的、口

唇的およびサディズム的願望は、早い時期に抑圧され、母親に殺されるという不安に転化する。これが母親の死を望む願望、母親に対する無意識的な敵意をもたらす。

能動性が抑圧されたときに、母親に殺されるという不安が生じるという点について、ここで考察を進めてみよう。フロイトによれば、子ども（性差が生じる以前のいわゆる前エディプス期の）は性愛についてだけではなく、心的な経験の全てに受動的な印象を受け取ると、それに対して能動的に反応するが、これは子どもが外界を克服しようとする試みの一部である。それゆえに「幼い少女がそれまでもっていた男性らしさを抑圧すると、これによって少女の性の営みのかなりの部分に永続的な障害が生じる場合が多いのである」（1931）。それでは、少女を女らしさの道（父親との「好ましい」関係）へ進める要因は何なのかという問いが、再び立ち現れる。それは「少女の生物学的な要因である」（1931）とフロイトは断言する。この「生物学的な要因」とは、一体何を指しているのであろうか。この点がとりわけ後年批判的になるのだが、それは少女にペニスが欠如していることから生じる去勢コンプレックス、すなわち「ペニス羨望」であるという。しかもフロイトはフェミニストに対し懐疑的で、後年の論文の中では彼女たちに痛切なメッセージを送っている。例えば「はじめは、このペニスがないという事実を、自分自身に対する個人的な罰として説明しようとするが、これを克服して、この性徴が普遍的なことを了解した後には、この決定的な点において及ばないところのある性に対して男性とともに蔑視し、少なくとも、この判断においての自分と男性との同列視に固執するのである」（1925）。男性化したフェミニストが、女性性を克服しない女性たちを軽蔑していると揶揄している。この他にも両者が噛み合わない点が多いが、とりわけ家族社会学や社会史の研究は、フロイトが前提する特殊な家族構造を批判してきた。フロイトが分析の中心に据えたそれは、エディプス的構造の現代的な核家族なのであり、その普遍性が疑われているのである。確かにフロイトは原始社会と「文明」社会の家族を対置してはいるし、兄弟姉妹の数、彼らが出生した時期と去勢コンプレックスの現れ方の関係に触れてはいる。しかし子どもの最初の愛情の対象になる人は母親であり、だからこそ子どもが自立する際に母親との間には、エディプス的状况を引き起こすような葛藤が生じる。

市民家族（bürgerliche Familie）においても父家長権（*potestas patris familias*）

にしがみつく父親が息子の敵意を生む一方で、母と娘の葛藤が生じるのは、娘が母親を性的自由を阻む存在と認識しはじめる時である。『夢判断』(1900)で紹介されている例では、ある若い娘は躁狂性錯乱(tobsüchtige Verworrenheit)の状態に陥ると、母親に対して強い憎悪を示し、ベッドに近づこうものなら、ぶったり、悪態をついたりしたという。しかしこの娘は正常な状態において、ヒステリー性の防衛現象(Abwehrrscheinung)から、母親の身を過度に気遣っていた。ヒステリー的な少女が自分の母親に過度に愛着する(überzärtlich)のも、このメカニズムによるという。通常こうした葛藤を経て、女の子の最初の愛情は父親に、男の子の最初の幼時的欲望は母親に向けられるという。しかしそこで想定されているのは母親もしくはその代理の女性であり、養育者の多様な可能性一父親でも広く社会であっても良い一に触れてはいない。いずれにしろ母と娘の関係が夫との間に反復されれば、愛憎入り交じる葛藤が予想され、それを指してフロイトは「悪しき」関係と考えていた。

3-2-12. 「母親」の内面世界一子殺しのモチーフ

先の『夢判断』において二人の女性患者の夢には、大切な子どもが死ぬという場面が現れた。一人の女性のケースは、彼女が可愛がっている姉の子どもが死ぬという夢だったが、フロイトの分析によれば、そこにはその女性が密かに恋する姉の知人の男性に一子どもが死ねばお悔やみに現れ一会いたいという願望が隠されていた。もう一人の女性は15歳になる一人娘が、箱の中で死んで横たわっている夢を見た。分析の際に彼女が想起したことだが、前の晩の集まりで英語の「箱」(box)にあたるドイツ語について話題になった。そこで彼女はboxがドイツ語の「小箱(Büchse)」に似ていること、俗に女性の性器もBüchseと呼ばれていることも思い出した。彼女の夢は子宮のなかの胎児を表現していると解釈された。さらに夢解釈は続けられるが、フロイトの女性観を知る上で、興味深い分析を紹介することにする。「若い婦人の多くがそうであるように、彼女も妊娠しはじめると決して幸せではなく、お腹の子がいつそ死んでくれたらと願ったことも一再ならずあったことを打ち明けた。それどころか激しい夫婦喧嘩のあとで腹立ちまぎれに、両の拳で、お腹の子が死ねばいいとばかりに腹部をぶったこともあった。だから死児は事実一つの願望充足であったが、しかし15年間もおさりにしていた願望充足なのであった」。現代においても母

親による子殺しは社会に衝撃を与える。しかし実際のところ、個としての女性と母親の義務は矛盾することがあり、女性がこの二つの間で葛藤することが知られている。キリスト教義の裏づけで「母性」が制度化され、それが今よりも強固に女性に内面化されていたと思われる当時において、フロイトが母親の無意識に追いやられていた、個の欲動を明るみにしたのは驚くべきことである。ところでこの子殺しのモチーフは、フロイトの知り合いの法律家の夢にも現れていた。この法律家は人妻と不倫しており、彼女が妊娠することを恐れていた。そのため夢のなかで法律家は、子どもを殺して安心したと、フロイトは解釈した。このフロイトの発言の中には、当時の性規範をほのめかす部分がある。当時は結婚難（Ehenot）で堕胎が罪として罰せられる一方、受胎しないよう性交することは許される二重道徳が存在していたという。さらに子ども殺し（Kindermord）と産児制限（Kinderverhütung）を同一視する見解と、胎児に魂が入った時点から殺人が成立するという見解が対立しているのは、今日と同様であったらしい。胎児はいつ人間になるのかという中世から議論されてきた問題について、フロイトと法律家は以前から話し合っていた。

以上をまとめると、フロイトは二つの大きな研究領域を扱っていたと言える。フロイト理論にはこれまで紹介してきたように、子どもの性愛とその発達史を記述する実証的な側面がある一方で、人間の心的装置のメカニズムと言葉の関係を考察するメタサイコロジックな側面も持ち合わせていた。それは所与の運命（解剖学的差異や予定された発達史）に抵抗する人間の力（圧縮や移動といった心の作業の機制）こそが、夢を生み出す原動力であることに、フロイトが気づきつつあったことを示している。フロイト理論は『夢判断』以後、数年を経て転機を迎えた。「自我とエス」（1923）で明らかとなったように、後年フロイトの関心は「無意識」（Unbewußt）から「自我」（Ich）へと移行した。神経症患者の分析者に対する転移（Übertragung）や支離滅裂な言葉は、決して「病」などではなく、本人の（主体的な）創造性や抵抗と密接に関わっていることをフロイトは感じ取っていたのだ。

最後にここで強調したいのは、子どもの性愛の発達史に関するフロイト理論からは、特殊時代・地域的に出現した「近代家族」の特徴と、それが女性に及ぼす病理を見出せるということだ。「近代家族」が妻と夫、親（特に「母親」と子どもの関係に大きな変化をもたらしたことは既に述べた。「近代家族」が

外部世界から自律し、同時に孤立するのとは対照的に、家族内部では、妻と夫、母親と子どもの情緒的関係は濃密なものとなり、一方が他方の自由を奪い、拘束することも少なくはなかった。性愛もまた同様に、家庭に閉じ込められた。それは処女性の尊重や一夫一婦制の確立であり、これが「父権」を強化する重要な要因ともなった。「父権」の担い手ではない「女性」たちを冷遇し、他方で「母親」を称賛するという仕組みが発展した所以である。ペニスの有無が人間のパーソナリティや性役割を決定していたのが、フロイトの生きた社会であったならば、ペニスに欠如する女性が男性と同等である権利を求めることを、「ペニス羨望」(ここで「ペニス」は「父権」の象徴である)と名付けたのはあながち間違っていないのかもしれない。それは性差別が埋め込まれていた社会の模写であり、そこで起こる抑圧のメカニズムの記述でもあった。しかし、変化する可能性のある模写が現実を規定し、変化を思い描けないことにもなりかねない。「女性」の内面世界に共感を示し、それを理解しようと努めていたとはいえ、それでもフロイトが責められるとすれば、理論が現状の維持や正当化を導く危険性に、あまり自覚的ではなかった点であろうか¹⁵。

4. おわりに一ポスト・フロイトの展開について

最後にフロイト以降のフェミニズム／ジェンダー研究の動向を簡単に整理して、拙い筆を置くことにしたい。以上紹介してきたように、生物学的差異を男女を分断する決定的な要因と捉え、そこから男女の様々な差異、育児などの社会的分業も説明しようとしたフロイト理論は批判的に継承されてきた。1960年代後半から思想の動向や枠組みの変化にも直面し、フェミニズム内部での「家父長制」理解も変化を遂げた。「男性」による「女性」差別や抑圧の形態を告発する「家父長制」という概念が、男性支配が不変であるかのような印象を与えると批判されたのである。フェミニズム研究者はこれを契機に隣接する研究分野と手を結んで、「家父長制」の内実をめぐる議論を深化させてきた。

「家父長制」の基盤は従来、近代特有の生産様式や経済形態、性差別的な諸制度に求められてきた。しかし本稿の前編で紹介したリッチをはじめ、制度上では男女平等が保障されてはいても、私生活においては一家事の分担や育児などの性別分業において「男性」と平等でないというリアリティを噛みしめる

人々がいた。「個人的なことは政治的である」—私生活で経験する性差別は決して個人的なことではなく、性差別に支えられた社会構造を反映している—という意識も生まれた。「家父長制」とは物質的基盤にだけ還元されるものではなくて、「家父長制」を反映した文化こそが構造的に女性を抑圧しているのではないか、または「家父長制」と「資本制」が相互に規定し合っているのではないか⁶⁰という視角も、こうした社会背景から析出されたのである。1972年に米の性科学者 J. マナーは、フロイトの言う解剖学的な性差 (sex) と区別して、社会や文化に規定された性差を (元来は文法上の性を意味していた) 「ジェンダー」 (gender) と名付けた⁶¹。現在では広範な専門領域の研究者が、「ジェンダー」概念に依拠するようになっていく。「性役割」という概念が男女の相補性を想起させるのに対して、「ジェンダー」は男女間の権力関係も含意しているだけでなく、階級、人種といった変数とあわせて、性差を広い文脈に位置づける道を切り拓いた。「ゲッター化」していると見られる傾向にあった「女性学」が、近接する学問領域—例えば「男性」の規範的なあり方を問い直す「男性学」や「クイア・スタディーズ」など—と連携し、ジェンダー研究へと歩を進めることになったのである。父が独占する女たちに対する、息子達のエディプスの欲望を前景化するのではない、人間の主体形成をめぐるフロイト理論の読み直し—本稿で扱ったような母と娘、あるいは兄弟同士の物語の再発見や再検討—も、引き続き試みられていることを付記しておこう⁶²。

〈註〉

- (1) T・バーンズ+R・F・ベールズ／橋爪貞雄他 訳, 1970,『核家族と子どもの社会化』黎明書房, 4頁。
- (2) 一, 1905, *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*, (GW ; Bd. 5)
一, 1977, 「性欲三論」, (選5)
- (3) 一, 1925(邦訳1969), 「自らを語る」, (選17)
- (4) 一, 1925(邦訳1977), 「性格と肛門愛」, (選5)
- (5) 一, 1908, *Über infantile Sexualtheorien*, (GW ; Bd. 5)
一, 1977, 「幼児期の性理論」, (選5) 101頁。
- (6) 一, 1925, *Einige Psychische Folgen des anatomischen Geschlechtsunterschied*, (GW; Bd. 5)
一, 1977, 「解剖学的な性の差異の2,3について」(選5)。
- (7) 一, 1909, *Der Familienroman der Neurotiker*, (GW; Bd. 4), s. 223.
一, 1996, 「神経症者の家族小説」, 中山元 訳『自我論集』筑摩書房, 225頁。
- (8) 一, 1910, 12, 18, *Beiträge zur Psychologie des Liebeslebens: Über einen besonderen Typus der Objektwahl beim Manne*, (GW; Bd. 5)
一, 1969, 「愛情生活の心理学への寄与—男性の愛人選択」(選14)
- (9) 一, 1908(邦訳1977), 「幼児期の性理論」, (選5) 101頁。
- (10) 一, 1931, *Über die weibliche Sexualität*, (GW; Bd. 5)
一, 1977, 「女性の性愛」, (選5)。
- (11) 一, 1923, *Jenseits des Lustprinzips ; Massenpsychologie und Ich-Analyse ; Das Ich und das Es*, (GW ; Bd. 13)
一, 1970, 「自我とエス」, (選4)。
- (12) 一, 1900, *Die Traumdeutung : Über den Traum*, (GW; Bd. 2-3)
一, 1969/70, 『夢判断』(上・下)(選11・12)
- (13) Juliet Mitchell, 1975, *Psychoanalysis and Feminism*. Harmondsworth : Penguin. (邦訳: ジュリエット・ミッチェル／上田昊 訳, 1977, 『精神分析と女の解放』合同出版); Kate Millet, *Sexual Politics*, 2000, Urbana : University of Illinois Press. (邦訳: ケイト・ミレット／藤枝清子 他訳, 1985, 『性の政治学』ドメス出版)などを参照のこと。
- (14) H. Hartmann, 1979, *Capitalism, Patriarchy and Job Segregation by Sex*. In: Z. R. Eisenstein (ed.) *Capitalist Patriarchy and the Case for Socialist Feminism*, New York: Monthly Review Press.
- (15) J・マネー+P・タッカー／朝山新一 他訳, 1979, 『性の署名: 問い直される男と女の意味』人文書院, 17~19頁。
- (16) タニ・E・バーロウ／小林英里 訳, 2000, 「中国女性についての地域研究における恩義の領域とフェミニズムの亡霊」『トレーシーズ』; マリアンヌ・ハーシュ／寺沢みづほ 訳, 1992, 『母と娘の物語』紀伊國屋書店; J・ギャロップ／渡部桃子 訳, 2000, 『娘の誘惑: フェミニズムと精神分析』勁草書房などを参照のこと。